

8.30 オホーツクの舟唄

明日から北海道に小旅行です。

毎年夏には北海道に出かけているのですが、最近は、次第に道東に偏りつつあります。これは明らかに私の偏見ですが、道東が一番雄大な北海道に出会うことができるように思います。

道東知床半島は盛夏には人が多いので、できるだけ盛夏を避けて日程を組むことにしているのですが、少し遅いと台風にぶつかったり、早いと毎日濃霧に悩まされたりで、決して良くはありません。

でも、混雑する観光地のような道東にはなぜか行きたくないのです。

はじめて知床に行ったのはもう何年前のことになるでしょうか。

ご存知の方も多いと思いますが、倍賞千恵子さんが歌っておられる「オホーツクの舟唄」という曲があります。

これは有名な加藤登紀子さんの「知床旅情」と同じ森繁久弥さん作詞作曲で、曲は知床旅情と同じなのですが、歌詞だけが違うのです。



私が、知床というより、知床から国後を見たいと思ったのは、この「オホーツクの舟唄」の最後の部分を聞いた夏でした。

「霞む国後 我がふるさと いつの日か詣でん み親の墓に ねむれ 静かに」
祈るように歌う倍賞さんの姿に思わず胸が震えたのを今でも鮮明に思い出します。

戦後 60 有余年、奄美、小笠原、沖縄が戻った後も、今でも北方四島は戻ってきません。いつの日か、力づくで無法に奪われた父祖の地が戻ることを信じて今も努力されておられる方々がおられますが、対露外交は翻弄され続けて何の進展もなく、国民の関心は薄く、支援もないという絶望的状况では、向こうの国が崩壊しない限り、帰ってこないのではないかと思ったりします。

それでも、民主党が政権を取り、鳩山政権が成立したとき、ひょっとしたら、本当にひょっとしたら奇跡的に将来の道筋がつくかも知れないと淡い期待を抱いたのですが、これは

全くの期待はずれでした。

鳩ぽっぽ総理は、奪われた国土を取り戻すどころか、危うく我が国そのものを売り渡しそうになりました。

祖父鳩山一郎氏とは比べるべくもないのですが、夢と希望を語るだけで、国際政治などとはできるわけもなく、こんな情けない男に領土問題の進展を期待するなど、夢想した自分の愚かさを、思い知らされたただけでした。

国際政治を動かすのは、夢でも愛でも理念でもなく、殆どの場合、力か利益だということくらい、理解していたはずなのに、心の片隅で数百年に一度起こる奇跡を願ったのは、遙かに霞む国後を見たことがあるからでしょうか。

売家と 唐様で書く 三代目

(売り家札を しゃれた唐様で書けても、三代目の世襲ぽっちゃんには、家を潰す能力しかないんですねえ)



倍賞千恵子さんの「オホーツクの舟唄」は、You-tube で、今も聴くことができます。

9.13 志と徳

「龍馬が行く」、大変な人気ですね。

「坂の上の雲」などとともに、学生時代、愛読していました。それもマルクスの「資本論」などと一緒に。今から思うと非常に変ですが、当時、みんな変だとは思っていなかったのです。

私、司馬さんの小説は大変好きだったことがあり、私の歴史観に大きな影響を与えたのは間違いありません。

若い私が、司馬さんが描く、坂の上のその向こうにある明日の日本を目指す明治の人たちの志に共鳴できたのは、高度成長の先にある豊かさと幸せに向かおうとする当時の状況からは自然だったと今も思います。

ところで、司馬さんは、日露戦争における秋山兄弟や児玉参謀次長とは対照的に、乃木大将を、西南の役の植木の戦いで連隊旗を薩軍に奪われ、旅順要塞攻防戦では多くの兵士を失う愚将として扱っています。

私の乃木観もついこの間までそうでした。

千代田線乃木坂駅を出てすぐ、外苑東通り沿いにある乃木神社も旧乃木邸(本当に質素です。山県有朋の椿山荘とは大違いです)も、ノミの市の時に訪れる場所ではしかありませんでした。



しかし、最近読んだ中西輝政さんの「日本人として知っておきたい近代史」によると、第二次長州征伐戦で幕軍の小倉城に少数で一番乗りをし、日清戦争では旅順要塞を一日で攻略するなど、「將軍の右に出るものなし」という名将の誉れ高かった乃木の実績は無視されている、と指摘されています。

日露戦争時の旅順要塞のロシア軍兵力は約4万5千、これに対し乃木の第三軍は約5万です。要塞攻防戦では攻める側は守る側の三倍の兵力を必要とするのが軍事上の常識のようですが、冷静に考えれば、拮抗する兵力でこれを陥落させたこと自体奇跡的だったと思います。

有名な(いや昔は有名だった)水師營の会見で、露のステッセル將軍が、旅順攻防戦で愛

息二人を失った乃木に哀悼の言葉をかけると、乃木将軍は「私の家はサムライの家なので二人の息子も晴れの死に場所を得て喜んでいるはずですよ。」と静かに笑って答えたと言われています。

日露戦争終了後、多くの部下を失ったことを明治天皇に詫びて退出しようとした乃木に、明治天皇は「卿が割腹して朕に謝せんとの衷情は、朕よくこれを知る。しかれども今は卿の死すべきときにあらず、卿もし強いて死せんとならば、朕世を去りたる後にせよ」と言う言葉をかけられたそうです。

乃木が、この後、一人黙々と全国の遺族と傷病兵のお見舞いに回ったこと、国から頂戴する金銭や報奨を遺族のために使ったことは余り知られていないようです。

中西は、乃木が当時の子供達に話した次の言葉を引用しています。

「驕りに傾くのは、お国の将来のために真に嘆かわしいことでもあります。どうか皆さんは質素剛健の徳を積んで、どこまでもお国を滅ぼす最も恐ろしい敵である、奢侈や安楽と戦う覚悟をもってもらいたいものです。」

今の指導者に決定的に欠けているのは、「志」と「徳」かも知れません。

今日 9月13日は、およそ百年前の1912年、乃木希典夫妻が、明治天皇の後を追って殉死した日でした。

11.22 事業仕分けの目的

第3回目の事業仕分けが終って少し経ちますが、今回、国民の関心は薄れた印象があります。

しかし、事業仕分けという作業によって、国民の多くは、これまでの政策決定と事業の運営におかしなところが沢山あることを知ることができました。失点が続く民主党政治の中で、唯一と言って良いほど国民から評価されているのも、このためではないかと思います。

ただ、当初民主党が、この事業仕分けによって無駄を省いていけば新たな施策の財源を捻出できると言っていたことについては、全く空論であったことも明らかになりました。

そろそろ、3回にわたる事業仕分けについて、総括を行うべき時のような気がします。

一番問題とすべきことは、「この事業仕分けは何のために行われたのか」という点です。

事業仕分けが、これまで政府が行ってきた様々な事業や制度が本当に必要なものか、無駄なものか、ということ判断するために行われてきたとすれば、少し論点を整理して考えてみる必要があります。

ある事業について無駄が指摘される場合、二つのケースが考えられます。

第1は、「その事業や制度そのものが不必要」と考えられる場合

第2は、「その事業や制度の実施・運営に不効率で無駄なところがある」と考えられる場合

この二つは、一緒に問題とされることが多く、事業仕分けでもかなり混同した議論が行われていました。でも、私は、この二つは全く違うものだと思います。

第1のケースの判断基準は、あくまでも、私達が目指す社会の実現にとって意味があるかどうかです。目指す社会の実現にとって何の意味も見いだせないようであれば、その制度や事業の廃止は当然と考えられます。

他方、第2のケースの判断基準は、効率化することや無駄を省くことが、その事業や制度にプラスになるかどうかです。

ただ第2の無駄があるからという理由だけで、第1の役割を果たしている事業や制度を廃止すべきかと言え、そうではないでしょう。

3回の仕分け作業を見ていて、このことすら理解できていない「仕分け人」なる人がかなりいたことは残念なことです。

例えば、今回議論された食料安定供給特会会計の中の米の100万t備蓄については、備蓄

方法等が無駄で不効率であるからといって、備蓄を止めたり、少なくすることにはつながりません。どの程度の備蓄が必要かは、国民生活の安全という別の視点から冷静に検討されなければならないことであって、備蓄方法や運営方法を改善して経費削減を図ることは全く別のことです。

ところで、事業仕分けが、制度や事業そのものを廃止するかどうかという点まで踏み込んでいくのであれば、その前に、私達の前に、私達の社会が目指すべき姿を提示しなければなりません。

制度や事業を廃止するかどうかは、それが将来の私達の社会の実現にプラスかどうかを判断する必要がありますが、私達がどのような社会を目指そうとしているかを十分に明らかにしないまま、第2の無駄を理由に、制度や事業を廃止するようなことは決してしてはならないと思います。

国交省の味方をするわけではないけれど、社会資本整備のための特別会計を廃止するのは、この過ちを犯そうとしていると思うのです。

例えば、道路一つみても、これ以上整備をする必要がないなんて誰も思っていないのです。私達の回りは歩道もないような道ばかりですし、そちらの方に私達の税金をもっと回すことを可能にするためにも、高速道路等を利用して受益を受ける方々にその整備費用を一部担ってもらうのは、必要なことだと私は思います。

受益者に一部費用を負担してもらうために不可欠の制度である特別会計を廃止してもいい、というのは、どういう考え方に立っているのでしょうか。

私達の将来の社会が、十分な社会資本が整備された豊かなものであることを望むなら、国民の負担する税金だけでなく、それを利用して受益がある方にその受益の一部を負担してもらうことは必要だと思います。河川や下水道の整備でも同じです。

もちろん、そういう受益者負担がなくても国民が望む水準の社会資本が整備できるだけの豊かな財政であれば別ですが。

特別会計で馬鹿げた無駄遣いが行われていたことには多くの方が憤慨しました。しかし、無駄遣いにつながらないようにするにはどうすればいいかを考えるのが、まともな政治ではないかと思います。

それをせずに無駄遣いになっているからという理由で、受益者負担を支えている特別会計の制度そのものの廃止をしなければならないというのは、理解に苦しみます。

私は、国民の間に評価の高い？行政刷新担当大臣の方にはこのような本質議論をしていただきたいのです。間違っても、ものの数時間の議論で、しかも「一番でなければ駄目なんじゃないか」などといった極めて質の低い議論で、この国を滅ぼすようなことをするのは、どうか止めてもらいたいのです。

12.21 迷い

師走も押し迫ってきて新年が近づいてきますと、年内に今年起こったことを整理しておこうかなという気持ちが湧いてきます。大晦日から一夜明けると、どこか凜とした空気に入れ替わるように気がして、もう過ぎ去った年のことを考えるのは止めて、新年に当たってこの一年どう生きるかを考えようなんて思ってしまうので、今のうちです。

今年私が強く感じたのは、ようやくデジタルの世界一色だったわが国にもアナログの見直しの気配が出てきたなということです。私、昔からどうしても「デジタル的思考」というのに馴染めなくて、なんでもデジタル的に処理する世間の風潮に、内心、嫌気を感じていました。

え、「デジタル的思考」ってナニって？

エー、のっけから難しい説明をするのは避けるとして、誤解を恐れずに言うと、ものごとを1か0か（YESかNOか）という区分で考える思考のこととでも思ってください。例が悪いけれど、原発の稼働に賛成か反対か、なんてよく言われますよね。とりあえず、この二者択一でものごとを判断する考え方とでも言うておきます。

デジタル的思考が瞬く間に主流となった背景には、やはりコンピューターの普及があるのだと思いますが、本来アナログの世界である音楽についても、今やデジタル録音再生方式のCD等の全盛期で、レコード派や生演奏鑑賞派は圧倒的少数派です。溝の刻まれたレコードをダイヤモンド針で拾い上げて、真空管アンプなんぞで聴くアナログ方式の方が、雑音コミでも、ずっと臨場感があるような気がするんですけどね。

それはさておき、思考方式においても、0か1か二者択一の形で提示することが主流になってきたのは、マスコミの仕業のような気がします。

まあ、これは、故意にというより、マスコミ関係者の程度の低さと視聴率優先からきたもののようなのですが。

人間には、ものごとをできる限り単純に理解したいという願望のようなものがあって、二者択一の議論は、大方の方には、受け入れやすいのですね。

ややこしいことを言っても、どうせ聞いてくれないのだから、とにかくわかりやすく、イエスカノーかで行こうじゃないかなんて、大義名分もあるし、なにしろ説明する側はめちゃ楽なんですね。

これに目を付けて悪乗りしたのが、狡猾な劇場型の政治屋さん。

わざと議論を二つに分け、その一方に人の感情を逆立てるレッテルを貼って、正常な議論を押しえ込むという手段を取ることを常用し始めたんですね。

でもね、世の中は、そんなに単純ではなくて、「生きるべきか、死すべきか」なんてケースはそう沢山あるわけではないですから、実は、0と1の間には、0.1とか0.3とか0.7とか沢山の選択肢があるのですね。

このところの選挙を眺めても、国民に二者択一を迫る「レットテル選挙」（変革か守旧か、大きな政府か小さな政府か、なんて覚えがありますね）ばかり。

これ、小選挙区の導入のせいなんでしょうね。

投票する側も、この方が真剣に考えなくても済むから楽らしくて、政治屋さん、マスコミ屋さん、それにちゃんと考えるのが苦手な沢山の国民の方々の鉄のトライアングルが成立して、今や世の中は、アナログ小数点派は絶滅危惧種扱いです。

でもね、大胆で歯切れのいい主張は聞いていて気持ちが良いけれど、プラスと同じくらい、マイナスももたらすのですね。

政治の世界の本質は世の中の利害調整。これがデジタルな形で行われるようになると、世の中には、勝者と敗者しかいなくなります。

利害が対立する場合の調整は、様々な利害関係者が意見を戦わせ、少しずつ譲り合って成案を得るアナログな形で行う方が適切なことが多いと思うのですがね。

完全な勝利は、敗北より害が大きいのだということを歴史から学ばない国や社会は、いつか自分たちの国や社会が少数派になってしまったときに、気がつくようですよ。ほどほどの勝利こそが大切なんだということを。

最近、デジタル的な主張では、もう説明できないような複雑な事態が次々と起こっていますが、先ほどの原発問題なんかでも、基本的には反対なんだけれど、直ちに廃止とはいかないとか、賛成なんだけれど、今のままでは不安が大きすぎて困るよねとか、これは0.3とか0.7の世界なんですね。

さて、デジタル的思考に慣れた方々が困るのが対立点が沢山ある問題。選択するときによくわかんなくて迷ってしまうなんて、街頭インタビューで言っているのに最近よく出くわします。

ところで、全く話が違いますが、「迷う」という字は、「米」という部分と「しんにゅう」という部分からできています。

ご承知のように「しんにゅう」は道を行くという意味で、「米」はものが散らばっているという意味ですね。

つまり、散らばっているもののどれを選択する道を探るか、困ってしまうと言うのが「迷う」の本来の意味ですから、今の状況にぴったりですねえ。

散らばっているのは、今のところ、余り違いがわからない「米粒」のようで、実際に食べて見なければ、ウマイとかマズイとか、毒が入っているとか汚染されているとかはわからないようですね。所詮、米粒にいくら注目しても、選択するにはどうですかね。

私達の前にばらまかれた米粒が選択の参考にならないとすれば、「迷う」から「米粒」を

外して、「辻」に戻るしかありませんね。

もう一度辻に立ってみて、金のように見える米粒をばらまいている人達が、これまで何をしてきたか、デジタル思考を悪用してこなかったかどうかを確かめてみるしかないようですねえ。

7.3 立憲民主制の危機

現行憲法下で、解釈上認められないとされてきた「集団的自衛権」の行使が、突然、一人の思い込みの激しい男が牛耳る政府によって、180度転換され、認められると解釈変更されたことに、開いた口がふさがらない思いをされた方が多いのではないかと思いますね。

これまでずっと我が国憲法の解釈上認められる余地がないと理路整然と説明してきた「内閣法制局」のトップの首をすげ替えてまでの強引な行為に加えて、その男がした説明は論理的説得性が全くなくて、もっぱら情念に訴えるものだったから、これでは、まるで白を黒だと言いくるめるようなものではないかと感じて、暗澹たる気持ちになった方が多かったのではないかと思います。

♪ 白を黒だと言わせることも / しょせん豊じゃ死ねないことも
百も承知のヤクザな家業 / なんで今更 悔いがある
ろくでなしよと 夜風が笑う

これ、なんの歌詞かご存じですか？

これは、私が好きな高倉健さんが、昭和残侠伝の映画の中で歌った「唐獅子牡丹」の三番の歌詞。

♪ 義理と人情を秤にかけりゃ 義理が重たい男の世界～ (唐獅子牡丹一番)
で始まるこの歌を聴いたことがある人も多いと思います。

私が、「国民のためだから」と同じことを繰り返すことしかしない男を見ていて、頭に浮かんだのは、この歌。

いつから、私たちの国のトップは、夜風に笑われるような「ろくでなし」のヤクザになったのでしょうかね。



これでは、白を黒だと言いくるめるのが常套手段のお隣の大国の無法な振る舞いを、どうして批判することができるのでしょうか。それとも、ヤクザに対抗するには、自分たちもヤクザにならなければと思いついでいるのですかね。

自×党という政治組織は、しばしば都合が悪くなると、立憲政治や民主政治の基本ルールを無視して、超法規的な行為をする性癖があって、これまで何回か、そういう違法違憲な行為をしては、開き直ってきた過去を持っていることはよく知られています。

昔、超法規的措置を行う必要に駆られて、「一人の命は地球より重い」なんて訳のわからないことを言って世界から馬鹿にされた政治屋サンがいましたっけ。結果として解放された犯罪者によって再び何人もの命が失われたことは都合良く忘れていますが。

日本には、憲法裁判所という制度がないものですから、「憲法違反？ それはどうした」と開き直られれば、議院内閣制の下では、次の選挙まで国民はデモくらいしか意見を表明する手段がないのですね。

それでも、違法、違憲の行為に対して、これまでの政府は、悪いことをした子供のように、俯き加減の姿勢で弁解し、国民の大多数も仕方ないなあと思っている場合には、それほど大きな問題にはなっていないのですが、今回は、国民の多くが反対或いは不安を抱き、一方、政府の方は反っくり返った姿勢でいるのを見ると、やはり立憲民主政治が崖っぷちの危機にあると思わざるを得なくなります。

「嘘も百回吐くと本当になる」とはナチスの宣伝相・ゲッベルスの言葉。

「国民のため」と言い続けていれば、そのうち、いつかは、国民もそう思うようになると思っているのだとすれば、私たちの方も、いつまでも「それは違う。間違っている。」と語り続けることが必要になります。

ところで、今の憲法を押しつけ憲法だという方がよくおられますが、憲法前文を読めば、常に、戦争を起こすのは「政府」であり、それを止めることができるとすれば、それは国民が主権を行使するしかないと考えていることがわかります。

ヤクザと変わらないことを平然とする男が、いくら「国民のためである」という美辞麗句を並べてみても、今回の政府が行ったことの最大の問題は、主権者である国民の意見を聴かないで「戦争の惨禍」につながるかも知れない解釈変更を行ったことにあると、私には思えます。

これは、どう控えめに見ても、立憲政治を否定し、国民主権に基づく民主政治の基本を覆し、あたかも君主制に戻ったかのような振る舞いとしてしか考えられません。

集団自衛権の是非以前の問題として、このような「立憲民主政治」の危機を回避するための方法を真剣に考えなければならなくなったことを、私は大変情けなく思うのです。

あんなに大勢いる保守政治家たちの中から、ほんの僅かな声しか上がらないのは、昭和初期の議会を思い出させて、私を暗い思いにさせます。

私は、国の領土が侵略され、同胞の生命が危険に曝される時に、これに敢然と反撃する「個別的自衛権」は、我が国と国民の固有の権利だと思っているのですが、その上で、集团的

自衛権の行使については、そのプラスマイナスをもっと慎重に検討すべきだと思っています。

集団的自衛権と個別的自衛権の区別がわからないまま、きちんと学ぶこともしないで声高に意見を叫ぶ方々は論外として、この議論では、三つのことを視野に入れるべきだと思います。

一つは、どの国と集団を組むかという問題です。組む相手を間違えば、例えばかつてヒトラーのドイツと組んだときと同じことが繰り返されるかも知れません。世界中で一番敵が多い国と組めば、その国が攻撃された場合、我が国は否応なく巻き込まれてしまいますから、これは極めて重要なことであるはずで

二つ目は、集団的自衛権を行使する場合、たとえ戦争行為までいかないとしても、自衛権の行使の対象となる相手方が、こちら側をどう考えるかということです。

これまでどんな事情があるにせよ、刃を向けてくることがなかった国がこれからは敵対勢力になるのであれば、その勢力を弱体化させることは、向こうの正義にかなうことになるのです。いくら、集団的自衛権の行使は、そのような形ではしないとの言い訳をしても、相手方にそれが通用するとは思えないのです。

三つ目は、戦争のスタイルが大きく変わってきているということです。

正規軍が向かい合って、宣戦布告をし、戦闘に入るとするのは第二次大戦以前の話。

今世界各地で行われている戦で中心となっているのは、非正規軍であり、その戦い方は相手の正規軍を叩くだけではなく、無差別のテロが中心です。

ある日突然、繁華街で爆弾が爆発し、多くの市民が犠牲になる。こういう戦いに対して正規軍は無効です。

心配しなければならないのは、自衛隊の方々の命だけでなく、街角や地下鉄、原子力発電所などで起こる無差別テロなのですが、私たちは、そういう戦争に対する覚悟が本当にできているのでしょうか。

我が国の生命線である石油を確保するのと引き替えに、毎日のようにおびえて暮らすようになって初めて、こんなはずではと思っても遅いのです。

自衛権の行使の相手方が、国であるとは限らない。抑止力議論が機能するのは、曲がりなりにも相手が国の場合に限られるのです。

自衛権の行使は、砲弾を撃つこととは限らない。相手方から見れば敵を支援するものは敵なのです。

私たちが、集団的自衛権なるものについて、判断するためには、もっと沢山のことを知る必要があります。それからでも、決して遅くはないのです。